

発行所  
 広島市南区出汐町  
 広島皆実高等学校内

皆実有朋会  
 TEL254-1290



高史の足を歩もう  
 皆歴の手を握ろう  
 五年後、元氣な歩  
 り、十年後、歩む  
 よ、二十五年後、歩  
 期、五十年後、歩  
 第一、八十歳、歩  
 生、九十歳、歩  
 期、百歳、歩  
 第一、百歳、歩  
 女、百歳、歩  
 男、百歳、歩  
 長、百歳、歩  
 校、百歳、歩

かねてから懸案でありました本会の社団法人解散手続も、六十年十二月二十五日に解散許可を得られ、六十年三月にはすべての手続を無事終了することができました。この社団法人の解散許可により、皆実有朋会は、新しく法人格のない同窓会として再出発することになりました。この新しい皆実有朋会の発足に当たり、去る六十年八月の総会で承認された新しい会則にもとづき、新役員を選任することに、従前から社団法人皆実有朋会の理事長として、本会の発展に御尽力くださいました中川千代様に引き続き会長就任をお願いしたところ、一身上都合からご辞退されました。そのため、有朋二十三期の岡ヤス子様に、新しい皆実有朋会の会長に就任していただくよう要請し、新会則にもとづき、六十一年七月十五日の幹事会で推薦し、八月十七日の総会において承認を得て、皆実有朋会初代会長(通算五代)に就任していただくことになりました。

この度皆実有朋同窓会の役員会においてご推薦いただきました新会長として、紙面を通じて會員の皆様にご挨拶させていただきます。先ず現在まで二十年の永きにわたり、内外ともにご多忙なご日常にもかかわらず、本会の発展的運営のためにご尽力くださいました前中川理事長様のご芳苦に對此こそ、厚く御礼申し上げます。

私は、県立高女二十三期生、現広島女子大学の前身、女専卒業後、母校の県女へ十六年、その後、高等学校さらには短大と永年教員生活をつづけさせていただきました。会長のお話を伺いました時、年齢的・能力的の面からその器でないことはよく承知しておりますので随分迷いましたが、皆様のご熱意あるお話を承り、分不相応ながらお引受けいたしました。何とぞよろしくお力添え、ご指導のほどお願い申し上げます。

## ご挨拶に代えて



会長 岡 ヤス子

「親切・辛抱」の校訓を心に誠実と精進の精神を身につけることをめざして相立高女四十余年の歴史。戦後の教育制度改革を基に、二十四年高等学校が発足しました。暫くの年数でしたが、県女の校舎が設置せられた地に、県女の伝統を引継いで誕生されたのが皆実高校です。堅実な校風のもと、高い教育的成果を挙げられている皆実高校。この両校の卒業生の同窓会が統合されたことは自然であり、「會員相互」「母校(在校生)と會員」の連帯が、敬愛と信頼の密度の豊かな結びつきでありたいとの念願は、二万数千名會員の共通のものであると考えます。とはいえ、これまでの他の高校での経験によれば、會員となれば、年数の浅い若い方々を中心に、同窓会に関心が薄く、若き日の思い出に心柔らぎなつかしい感傷にしたりするのはクラス会、同期会と思われ、理解できないではありません。しかし、伝統を受け継ぎ、同じ学び舎の出身者という得難い因縁で結ばれた人間関係のきずなを、わたしたちは、大切にますます大きく育ててゆかなくてはならないと思います。

皆実高校の教育方針の「勤勉・強行・責任・自由」はまさに、かつての教育方針に時代の動向が加味された内容であり、県女と皆実高校は「同系列校」の感をもつのは当然で、このことがこれまで會員一同母校を中心に互いの親密観・連帯観を保ってきたと考えます。

例年八月開催される総会は、皆実・有朋の各一期が当番としてご尽力いただいております。皆実と有朋の會員の皆様は、社会的・家庭のお立場には相違点があり、お立ち寄りには十分な連絡と協力によって、労力や経済面の負担を乗り越えての信頼は、固い會員相互の信頼の現われと云ってよいでしょう。

一方、母校の現西本首三校長先生および歴代の校長先生をはじめ諸先生方からは、事あるたびに暖かいご配慮を賜わっており、心より感謝申し上げます。

人は総べて自主独立の精神を持たねばなりません。互いに心を開き、協力し合える同窓会存在の意義をもと

## 退任にあたり

(前理事長) 中川千代

天高く馬肥ゆるの秋、今一番一年中での肥ゆる秋と思います。

振り返って私の学生時代を見ますと、色々現在の学生さんの思いもよらないような時代でした。

白神社の東隣りの校舎から電車通りを宇品まで歩いて軍隊の見送りに度々行きました。英語の授業時間が当ると大喜びで足の痛いのも忘れませんでした。現在もバスや電車で通過する時は懐かしい思い出の一つです。

私共の時から五年制度になり、先輩の皆様よりも一年多く楽しい学生時代を送る事が出来ました。結婚後は、主人の任地の朝鮮の各地を転々と致しました。その時、京城(現在ソウル)の検事局の検事正の奥様が九期の先輩でいらつしやいました。私はとても嬉しく、久留島先生からよくお話を伺っていましたので、早速検事正官舎にご挨拶に行く時の足どりごととて、も軽くはつんでいました。とても力強く先輩の右難さを感じました。

この思いはとて大きいく以前にも書いた事がありますが、私の人生の一つの大きな思い出の一つになっております。

母校とはよい言葉と切実に感じております。私自身母となりまして、果してこの好きな言葉の通り、の人生を送り得たかと振り返りますと恥かき限りと思っております。これからの残された人生を、少しでも世間の皆様に迷惑をかけないで、くいのない人生を歩みかたいと願っております日々でございます。

これから、増々皆実有朋会が発展し、楽しい会となりまうように、心から念じております。